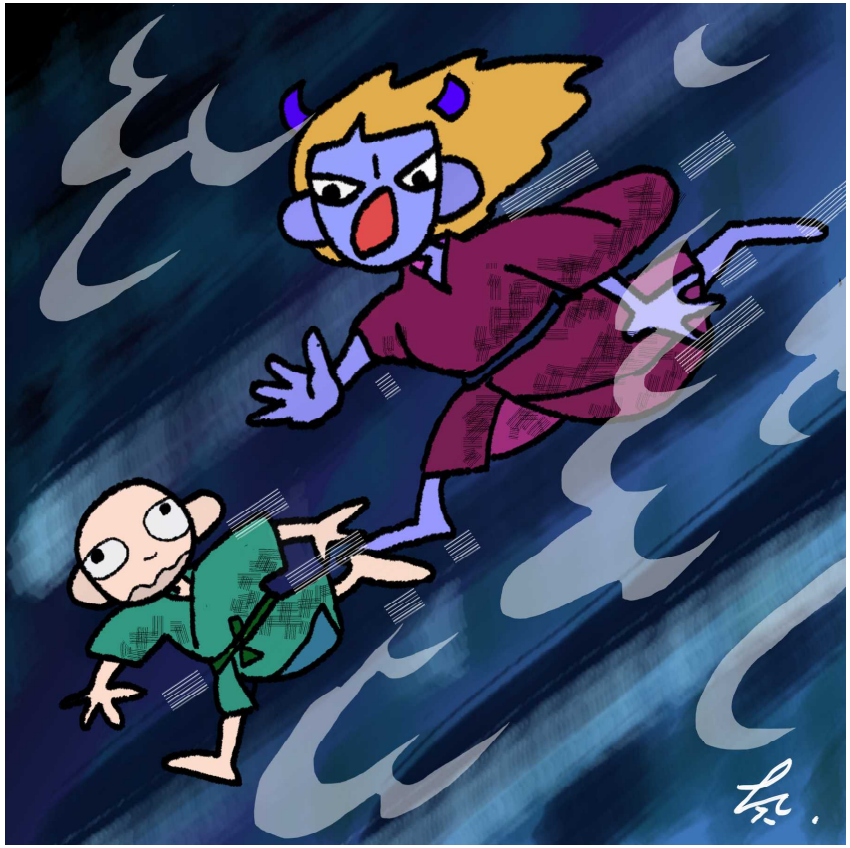
島根の民話

第五回

姉は鬼・飯石郡飯南町角井

令和2年9月9日

収録・解説・酒井董美（ただよし）　イラスト・福本隆男



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_20200801.html

語り手　中原ワイさん（大正10年生まれ）
収録・昭和63年8月2日

あらすじ

昔、お父さんとお母さんと姉と弟が住んでいた。お父さんとお母さんはそのうち死んでしまった。

姉弟二人で大きくなっていったが、姉さんが毎日、夜になったら「ついて来るなよ」と出て行くので、弟は「何するだろう」と不思議に思っていたけれど「今晩はついていって見てやろう」と姉さんの後をついて行ったら、姉さんは山の中へ入って、墓の方へ行くので、こわいことだと思って追って行ったら、姉さんは、その日に死んだ人をひっぱり出して、それから、角の生えた恐ろしい鬼の顔になって、その死人をがりがりがりがりおいしそうに食べ出した。弟は恐ろしくてとんで帰った。

またあくる晩も、姉さんが出て行くので、弟は恐ろしくはあったけれど、ついて行ってみたら、また夕べのように死人を出してごりごり食べる。弟はそのあくる晩もまたついて行った。そうしたら、ちょっと近くにおったでその棺の蓋ぁ取ったのが当たったので「痛い！」と弟が言ったら、姉さんが、「われ見るな、言うたのに見とったかい。よし、おまえもいっしょに食っちゃる」と言って追いかけてきたので、恐ろしくて恐ろしくて弟はとんで逃げ、姉さんのところへは帰られないので、弟はどこか旅に出たのだげな。

何年かして弟は、姉さんが元気でいるものかどうかと思って家へ帰ってみたら、姉さんは鏡を立てて、髪を結っていた。それで「元気だったか」言って、少し話をしていた。

そうしたら二匹の白鼠が出て、弟のワラジの紐を一生懸命ひっぱるそうな。「早う出て行け、出て行け」と言ってひっぱるので、それが死んだお父さんとお母さんだったかも知れない。

それで弟も、とうとう恐ろしくなって、とんで出たら、「われ待て、食べちゃるけえ」と言って、また姉さんがものすごい顔して、鬼になって追いかけたて来る。

それで弟は恐ろしくて恐ろしくてどこまでもとんで行ったそうな。これでこっぽしだ。

解説

この話は『頓原町誌』を作るための民俗調査の一環として、筆者も口承文芸部門を担当したおり、中原さんのお宅で収録させていただいたものである。

関敬吾『日本昔話大成』の本格昔話「逃竄譚」の中の「妹は鬼」の話型で登録されている。主に九州で収録されている話である。わたしにとってこれまでに他で同類は収録できないものであった。そこで中原さんにお願いすると、「子どものころ、祖母から聞いたものです」と言われながら、懐かしそうに語ってくださったものである。この話は、その後、弟がどうなったかまでは語られていない。後は聞き手の想像に任せられている。何とも不思議な話なのである。

（元島根大学法文学部教授）